

第4回自然環境保全基礎調査 海域生物環境調査（サンゴ礁調査）

勢村 均・山田 正

本調査は国の環境庁が定期的に行う調査で、県環境保全課と共同で行った。先ず県下のダイビング・ショップ経営者ならびに潜水調査を行っている団体等に、サンゴ礁の有無について聞き取り調査を行った。

その結果、隠岐島についてはイソバナ等の単体のサンゴ類は観察されるが、他は発見出来ない。また、美保関から益田にかけての沿岸部では、温泉津町の内湾部にキクメイシ科の1種が散在するが、他の造礁サンゴ類は観察されないとのことであった。

そこで、造礁サンゴ類の有無を確認するため、島根半島は才から雲津、多古、鷺浦の6調査区で、隠岐島は島前の海士、島後の飯美付近の2調査区で、水深10mまでの海底を主としてスキン・ダイビングにより目視調査した。

その結果、造礁サンゴ類としては、隠岐島島前でアワサンゴの小塊がかなり疎に点在したのみであった。その他のサンゴ類としては、隠岐島ではイソバナ類が散見され、島根半島では鷺浦でイボヤギの小群落が発見された。

従って、島根県沿岸部では、造礁サンゴは普遍的には存在しないものと考えられる。その一因として、冬季の水温最低期（2月中旬～3月下旬）の水温が低すぎる（11～12℃）ことがかんがえられる。

付記：本調査終了後に、多伎町小田地先および大田市鳥井地先でベルベット・サンゴが発見された。水深は10～24mと深く、群体は径1m以内で、冬期は茶色であるという。島根県西部では対馬暖流が沿岸により近づくこと、および本調査の対象範囲であった水深5m以浅よりも水深10m以深のほうが水温が安定している可能性があることより、本種が分布し得たと考えられる。今後、同様な調査を実施する場合には、島根県西部および隠岐島を中心にし、調査水深を20m程度まで拡大すると共に、マンタ法以外の調査法をとる必要があると考えられる。